

## 自由論題 4 中国政治の動態

### 報告 2

熊倉潤（日本学術振興会 海外特別研究員）

#### 「少数民族自治区上層部の再編過程から見た文化大革命（1966-76）」

文化大革命の始まりから、既に約半世紀が経過した。この間に、文革に関する研究は進展し、既に一定の蓄積を見るに至ったが、文革期の少数民族政策に関する研究は、概して文革期を民族工作全般が中断された、あるいは「破壊」された時期と捉える傾向があった。しかし、「破壊」の事例を分析したことをもって、「真実」に到達したと考えるのであれば、それは安易ではないだろうか。なぜなら、「破壊」の面の他にも、たとえば「破壊」を免れた面、あるいは一種の「創造」とも解釈されうる面があり、多様な面を総合的に考慮しなければ、文革に対する理解が一面的になりかねないからである。本報告では、第一に一部の少数民族エリートが文革期に打倒されなかったばかりか、昇進を遂げた事例、第二に1969年の中共第九回党大会以降、少数民族地域各地で少数民族党员、幹部が増加し、若い無名の少数民族基層幹部が抜擢された事例、第三に文革期に少数民族エリートが少数民族自治区の党委員会の最高ポストを掌握し、文革後に異動となった事例に着目する。文革の過程で一部の少数民族エリートは打倒されたが、他方で地位を維持し、或いは昇進し、また新たに登用された少数民族エリートも存在した。こうした文革期の多面的性格にもかかわらず、1970年代に行われた「現状分析」としての研究を除いて、以上の事例が本格的に分析された経緯はなく、改めて考察するに値する。本報告では、1970年代台湾の研究を紹介した上で、各少数民族自治区の『組織史資料』、回顧録、近年の文革研究の成果に基づき、統計分析と歴史研究の双方のアプローチから、文革期における少数民族エリートの変容について考察する（なお、「エリート」の定義は少数民族自治区党委員会常務委員クラス以上の人とする）。